松井　利江　氏の学位審査結果の要旨

主査：安酸　史子
副査：上野　昌江、三木　明子

本研究は、卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティが変容するプロセスを明らかにし、セクシュアリティを包括的にとらえた診断期からの継続的な看護ケアを検討することを目的とした研究である。卵巣がん経験者 18 名に対してグラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析し、モデル図と継続的なケアについて導き出している。

モデル図は 13 の【サブカテゴリー】、4 つの『大カテゴリー』から構成されている。卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティは、術前に【完全にはぬぐい切れない生殖器温存への期待】をもつことで、術後に【「突然」生殖器を喪った身体との対峙】をし、『女性である私の可逆性と不可逆性の問い』が生じることによって、『これまで通りに行かないセックスへの否定的感情』や『パートナーシップの真価の見極め』をしながら、『女性である私に対する納得』をするように変容しているとした。モデル図を基に診断期からの継続的な看護ケアについても具体的に提起されている。

審査においては、これまで明らかにされていなかった日本の卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容のプロセスを詳細に記述した新規性の高い貴重な研究であると高く評価した。

論文の修正・検討については、継続比較分析の過程を明確にすること、結果のモデル図の変容のプロセスの「分岐点」が明確になるように修正すること、看護実践への適用で示されている図に研究結果のカテゴリーを用いることなどについて指摘したが、いずれも博士論文最終提出期限以内で十分に修正可能な内容であり、本審査委員会では、卵巣がん治療を受けた女性のセクシュアリティの変容プロセスについて有用な研究成果が見いだされており、学術的発展性のあるものと評価した。したがって、本論文は博士（看護学）論文として価値があるものと認め合格とした。